

田口恒夫先生 追悼

田口先生 ありがとうございました

増井 美代子

田口先生、先生が生きていく下さるというだけで、嬉しくありがたく思っていた人は数しれないことでしょう。もちろん、私もその中の一人なのです。追悼文を、とお勧めを受けて以来ずっと困っています。

あまりにもいろいろな思いが次々と湧いてき

て、何をどう申し上げたらいいのか、また言葉にすることで心のうちが嘘になっていくような気もして、迷ってばかりです（「気の毒だねえ、いいんです、そんなの書かなくなたって」、というお声がかんだような笑い声とともに何処からか聞こえてくるようです。そう、先生はご自分のため

に他人を煩わせないようにと、とても気を使われる方でした。そしてご自分では他人のために労をいとわず、さりげなく気を使ってくださって。そのため、ともすると、未熟な私たちは勘違いして、自分勝手に楽なほうへと流れがちになり、反省することもしばしばでした。

私が初めて先生のご講義を受けたのは、大学二年生の後期の集中講義でした。言語障害、言語治療という耳慣れない言葉がなんだかとても気になったのをおぼえています。

三年生になった時、先生は専任教官として赴任されました。徽音堂（講堂）の舞台の裏が研究室になり、たまにお訪ねすると先生は歯切れのよいおしゃべりと同じように身のこなしもてきぱきとスマートでした。そのせいか、当時、私たちにっては多少近寄りがたい存在でもありました。

それでも、研究室に出入りさせていただいていた私たちは事情の許す限り先生の学外での講演や講義にもよく連れて行っていただいていた。

家政学部大学院の建物ができて研究室もそちらに移った頃には、内地留学の先生方や研究生も増え、相談を受け入れる体制も膨らんでいました。その頃、先輩の花上洋代さん（現姓高橋）や中田雅子さんと「今日は先生笑ったね」とほっとしておしゃべりしたことや、ケース会議で、教科書を一生懸命読んでインテイクをしたにもかかわらず、「一体その質問をすることに何の意味があるのですか!」とぼつさりと切られるように言われて半べそをかいたことを思い出すと（もちろん、今思えば深く考える余裕もなく、通り一遍に面談することで精一杯でしたので、そう言われても当然のことだったのですが）、先生はその当時もまだ、私たちにっては少々怖い存在だったように

思います。臨床場面を広く深く読み取られ、鋭い指摘をされることがしばしばだったからでしょうか。

ある時、「私は皆さんに学んだねえ。最初はこのお嬢さんたち（私たち女子大生）は、ただ子どもと遊んでばかりいてどうしようもないなあと思っていただけ」とおっしゃったことがあります。どういことですか？とお聞きすることはできなかつたのですが、それは、もしかしたら、講義の中で「脳性まひの子どもに泣かせながらでも厳しく訓練させて、その結果、足が何センチ上がるようになったとかいうのはどれほどイミがあるのか疑問に思っていた」というようなことをおっしゃっていらしたことと関係があるのかなと思います。つまり、子どもの意思や感情にお構いなく、治療だ訓練だと押し付けていて良いのだ

ろうかという疑問に、やっぱりそれで良いというはずはないんだ！と確信をもたれた（人がより良く成長していくための真髄を見抜いておられた）ということなのではなかつたのでしょうか。今、こうして書きながら先生は根っから、人を人として尊重して生きていらした方なのだと思つて感じ入り、手を合わせたくります。

お昼休み、研究室はなんと先生を囲んで昼食をとるのが常でした。先生はいつも奥様の愛妻弁当を丁寧に美味しそうに召し上がりながら、いろいろなことを話してくださいました。感心したり笑いの渦が起こつたり、先生のお人柄をより知る機会でもありました。お宅の近くで採れているという立派なキャベツを持ってこられて一枚ずつ葉っぱをはいで皆にくださり、キャベツってこういう味ですよ！と味わわせてくださったり、冬

の寒い日、ストーブの上に洗面器いっぱい甘酒を作ってご馳走してくださったこともありました。

相談の電話をかけていらした方が延々と話されていると、ご多忙中でも丁寧にお付き合いされ、時にはお弁当も中断されたままになっている様子を目の当たりにして、臨床家としての姿勢を思い知らされた感じがしました。誠実に、来る者は拒まず、去る者は追わず、という感じに見えました。またそれは、先生ご自身の生き方そのもののようにも思えました。

昭和四十五年当時、私は新潟の短大に赴任しておりましたが、その頃頂いたお手紙に「二歳、三歳とかになってから自閉症、情緒障害児などというレッテルを貼られてしまった気の毒な子どもた

ちの正体について、今おもしろいことを考えています。今いわれていること、今までいわれてきたことは全部おかしい、見当はずれではないかと。

本当はこれは発達、学習の障害なのであって、もともとのわけは新生児期にすでにあるはずの原始的な、反射の中のある面に *reflex* をもって生まれた子なのである。つつかれても表情筋を動かす反射が欠けているとか、あやすと喜ぶ、という現象が起こるのにその基礎として必要な反射が欠けているとか、そして一年、二年と経つうちに自閉的とか情緒障害とか、その時になって初めて出会う「専門家」にレッテルを貼られるような行動をする子どもに育ってしまった、という話。今にヤツパリそうだったのか（当たらずとも甚だ近かつた）ということがきつとわかりますよ」と書いてくださいました。

この「お見通し」が、数々の臨床を通じて実感

され、先生が、遺言のつもりで、と自費出版なさった『今、赤ちゃんが危ない・母子密着育児の崩壊』（二〇〇〇年六月）へと磨かれ凝縮されていったのでしようが、本当に、どうしてそんなすごい事がおわかりになるのでしょうか、と感嘆を超えてため息が出てしまいます。

いまでこそ、この「田口理論」も受け入れられるようになってきていると思いますが、当時先生はとても歯がゆい思いをなさっていらしたのでしようか、ノーベル賞を受賞なさったティンバーゲンの本に出会われた時、「涙が出そうなほどいい本（『自閉症・治癒への道』一九八七年）です」と手紙をくださいました。きつとご自分と同じように考えている人がこの世の中にいた！と感激なさったのでしよう。イギリスに行つてティンバーゲン先生にお目にかかったときの先生の感極まったご様子は今でも忘れることはできません

ん。

身をもって生き様を教えてくださいました田口先生。

子どもの、人の、世の中の、平和と幸せを願い続けられた田口先生。

本当にありがとうございました。

私は先生がいらつしやらなくなつた、ということがまだ実感できません。いつまでも今ままで同じようにいらしてくださいる気がしてなりません。

先生を尊敬し、お慕いしていた方々、皆それぞれに、教えていただいた事を大切に生きていかれるに違いないと思います。

私も私なりに大切に生きていきます。心の中に生きていてくださる先生に時々問いかけながら。

ありがとうございました。